

Basia Zaba and John Clarke (eds.)

*Environment and Population Change*

Liège, Derouaux Ordina Editions, 1994, 491pp.

岡崎陽一は、著書『人口統計学』のなかで人口学を形式人口学と実体人口学とに二分し、後者を「人口変数のみの研究に止まらず、人口変数と直接、間接に関連を有するその他の変数をも研究対象に含め、それら相互間の関係を研究する学問」と位置づけている。その意味で環境変数に注目した本書『環境と人口変動』は、実体人口学の論文集であり、しかも「環境」という語の多義性により実体人口学のなかのきわめて広範な領域をカバーするものとなっている。

英国人口学会 (British Society for Population Studies) と国際人口学会 (International Union for the Scientific Study of Population) の人口・環境委員会 (Committee on Population and Environment) とは、1992年9月9～11日、オックスフォード大学エクスター・カレッジにおいて人口と環境に関する共同会議を開催したのであるが、本書に収録されている論文はこの共同会議で報告されたものである。編集者である B.Zaba と J.Clark の35ページにおよぶ序章に続いて、23点の論文が、「総論」、「人口収容力 (carrying capacity)」、「アフリカにおける事例研究」、「健康と死亡」、「政策と政治」の5項目に分類されて掲載されている。

本書で「環境」という語で表現されているのは、おもに土地と大気である。土地は食糧供給と密接な関係があるから、人口と食糧との関係を論じた T.R.Malthus の『人口論』は、この研究領域の古典として位置づけられており、例えば、W.Gould は、ケニア西部の事例研究によって Malthus の理論およびそれと対照的な E.Boserup の理論を検証している。T.Downing と M.Parry は、大気の組成が変化することによって生じる気候変動が食糧生産におよぼす影響について考察している。

環境のとらえ方が多様であると同時に、人口のとらえ方も多様である。M.Lockwood は、ナイジェリア北部の事例研究によって、家族構成と環境との関係を追究している。P.Curson は、今後生じると予測される気温の上昇や地表に到達する紫外線量の増加がオーストラリアの人々の健康におよぼす影響について論じている。

地球環境と世界人口とのダイナミックな関係を総合的に明らかにすることを最終目標とするならば、採用すべきアプローチとして2種類が考えられる。ひとつは、人口と環境とのある特定の関係について地球規模の調査を行うというものであり、いまひとつは、地域を限定して人口と環境とのあらゆる関係を調査するというものである。「総論」の冒頭に配置されている IIASA (International Institute for Applied System Analysis) の W.Lutz の論文は、これら2種類のアプローチの両方を試みたものである。前半では、人口増加にともなう二酸化炭素排出量の増加にのみ注目し、総排出量を人口と1人当たり排出量との積として表すという方法により、世界人口を1人当たり排出量が均質であるようなグループに分けて考察する必要性を明らかにしている。後半では、人口、経済、土地利用、水の4つのモジュールからなり、モーリシャス島のみを対象とした人口・開発・環境モデルを紹介している。

本書の基礎となっている2学会の共同会議が開催された1992年は、リオデジャネイロで国連環境開発会議 (United Nations Conference on Environment and Development) が開かれた年であり、刊行された1994年は、カイロで国際人口開発会議 (International Conference on Population and Development) が開かれた年であった。これらの年は、人口と環境との相互関係に社会的な関心が寄せられていた年といえるが、今後も人口研究者は環境を視野に収めた研究を継続していくべきであろう。

(今井博之)